

ジャータカに於ける

菩薩思想について

佐藤 忠彦

ジャータカとは梵語、パーリー語の *Jātaka* の事で、原語的に解釈すると「生れた」とか「生れたもの」とかいう意味になる。このジャータカを仏教的に訳すと釈尊の前生物語ということになるのである。そしてパーリー三藏中に於いては経藏の中に包括されているのである。ジャータカという場合は厳密にいつて次の二つの場合がある。

(一) 釈尊が前生に於いて種々様々な苦行を積む有様を描いた物語、一つ一つを指す場合。

(二) 釈尊の前生物語を集大成してそれをジャータカと称する場合（南伝大藏経ではこの様になっている。）

(一) の場合は仏陀は釈尊一人、単にこの世に於いて修行したのではなく、あれほど偉大でありえたのは永劫の前世に於いて種々の修行をなしたからだと考えて種々の修行の姿を描いた物語を作つたのである。しかしジャ-

タカは最初より釈尊を尊信する弟子が創作したのではなく、当時のインドに於いて一般人の間に知られている寓話とか民間説話にその基盤をおくのである。即ち日本でいう「桃太郎」「浦島太郎」的な一般民間人の間にあつてもよく知られている説話等を用いて、その主人公や中心人物を釈尊の前生におきかえたのである。それ故原始民族が全て持ちうるところのアニマリズムの影響によつて、人間も人間外の動・鉉・植物も同一視されてしまつて、釈尊の前生の姿も種々のものになつていたのである。南伝大藏経中に集録されている前生物語の数五百四十七話中、最も多いのは、仙人に生れられた事で八十三回、次に国王の八十二回、以下樹神の四十三回、人師、王子、猿、商人、鹿、象、馬、奴隸等である。その種類は実に五十二種にも及んでいるのである。

(二) の場合は(一)で述べたジャータカの数々を集大成したものである。その代表的なものには、a パーリー文ジャータカ。b 本生鬘。c 所行藏経があり、漢訳本としては、a 菩薩本縁経。b 六度集経等がある。これらの本にはジ-

ヤータカが、波羅蜜に應じてまとめられているのである。

さて一方の菩薩思想について考察してみると、原語的に解する場合に大乘的と小乗的の二つの解釈がある。大乘的に解すると「菩提を求めている有情で、しかも菩提を持つ事に確定している有情」という意味になる。

かように大乘的に解釈すると、小乗の自己の成仏のため修行するを主要素とするのに対して、一方に於いては上求菩提の上向の因を持ちつつも他方に於いては下化衆生の面にも力を入れるのである。シャータカに於いてはこの下化衆生が強調されているのである。パーリー文ジャータカが上座部系でありながら大乘的要素が含まれている。この点に特色があるのである。又菩薩思想という場合は仏となるために修行している姿をかく呼ぶのであるため、行と更に仏になるためには他の衆生をも救済せねばならぬと願をかける。この誓願と更に時代的には後期になるのであるが、修行さえすれば、必ず仏となるであらうとする授記思想が、菩薩思想の主なものである。それ故それらについてジャータカに於いてはいかに表わ

れているかを研究しようとしたのが、私の論文の主眼点である。

ジャータカに於いては、授記思想は因縁物語の中に「―せば遂に仏となるであらう。―」というフレーズが数多くある故この授記思想が含まれていることは明らかである。又行については、このパーリー文ジャータカが南伝の書物である関係上十波羅蜜が説いてあるのであり、一つ一つの波羅蜜について詳しく書き述べているのである。又五百四十七の物語の正文を占める偈を見ても多くの場合が、一、布施 二、持戒 三、忍辱 四、精進 五、禪定 六、智慧 七、離欲 八、眞実 九、慈悲 十、捨心の十波羅蜜にあてはまるのである。代表的な例として「自己を捨てゝ愛するは善からず、自己こそは最勝にして最上なれ」(ジャータカ三八〇)「美貌なるも良し、年長なるも我これを敬う。素性の善きも良し、されど我に喜ばしきは戒あるなり」(ジャータカ二〇〇)

「そは諸力中の最上の力、智慧の力はオ一の力なり、智慧の力を備えたる、賢きものは利益を得。」(ジャータ

カ五二一)

「不放逸は不死の道にして、懶惰は死の道なり。」(ジャータカ五二〇)

「自から殺さず、人をして殺さしめず、自から征服せず、人をして征服せしめず一切有類に對して慈悲分あらば、その人に對して如何なる憎惡もあることなし。」(ジャータカ四五一)

以上の偈を見ても十波羅蜜の思想の表われている事がわかるのである。これらの菩薩行はまつたくの願行である。誓願を成就するために種々の行を行つてゐるのである。

この菩薩の一般的な願はいうまでもなく衆生救済の願であり、衆生を成仏させることである。この一般願が大乗仏教發展史上に於いて深く広く主張されてゆくのである。以上ジャータカに於ける菩薩思想について述べたのであるが、最後にむすびとして、ジャータカの仏教發展史上に於ける地位及価値について述べると、当時の仏教徒の釈尊超人化にはじまり、仏陀たる内容を覺つた有情であるとの觀念を生ぜしめ、菩薩の誕生を見るに及んでこゝ

に大乘仏教の萌芽が認められるのである。それ故ジャータカの發生は菩薩思想を生み、ひいては大乘仏教を起す契機となるわけである。こゝにジャータカの仏教發展史上に於ける地位が高く評価されるのである。又ジャータカは活動せる人間體驗の歴史的記録であり世界文化の共有財産であるといつてよいであらう。今日に於いても東洋、西洋に伝わりその地方の文明の發展を助けたものはバイブルを除いてはこのインドのジャータカより他はないと云われている程である。具体的にはヨーロッパの「イソップ物語」に影響を与え、中国に伝わり土着化されて唐代の初め、唐臨の「異報記」となり日本に入つては平安朝のはじめ「日本靈異記」を生じ更に「今昔物語」にも影響を与えているといわれている。しかもそれは長い間の民族體驗と社会的知性とが結合して出来たものだという点に於いて、ジャータカの偉大さと不朽の意義があるわけである。それ故ジャータカに於ける菩薩思想がかくも重要視される訳けである。